



# 日本 ハンザキ研究所ニュース 2010(1) : 通巻 No. 49

発行2010年1月31日

〒679-3341 兵庫県朝来市生野町黒川292

Tel/Fax: 079-679-2939

E-mail: info@hanzaki.net

URL: http://www.hanzaki.net

NPO 法人 日本ハンザキ研究所 栃本 武良

ハンザキの民俗資料①

## ハンザキ笠地藏

笠地藏は各地に見られる。笠地藏の名前の由来は知らない。お地藏さんが雨に濡れてかわいそうだと、心優しい人が笠をかぶせてあげたのかもしれないね。この写真のようなユーモラスな姿のハンザキ笠地藏は金津匡伸さんの遺作です。先日、兵庫県の日本海側にある環境省の竹野スノーケルセンター・ビジターセンター長の本庄さんから頂きました。私のハンザキ・グッズのコレクション展示室を見てのプレゼントでした。金津さんは豊岡市にある“日本モンゴル民俗博物館”の館長として子供たちに環境教育活動や自慢の焼き物の腕を披露しながら土鈴などの工作教室をやったりしていましたが、51歳という若さで昨年亡くなられてしまいました。私もハンザキの焼き物や土鈴を頂いてコレクションにしています。



ハンザキ笠地藏

本庄さんが神戸新聞の随想欄に、書かれた金津さんへの追悼文には「金津さん、話の続きをお願いします」とハンザキ笠地藏の話と共に早すぎる死を悼んでいます。本当に残念なことです。もっか、日本の大相撲ではモンゴル力士全盛時代となってスポットライトが当たっていますが、なんで豊岡にモンゴル博物館なのかと言うと、元はやはり金津さんのモンゴル・コレクションが切掛けだそうです。博物館になるほどの熱の入ったコレクターだったようですね。私のハンザキ・コレクションはまだようやく200点を超えたばかりですが、今年は、その中の幾つかに注目して紹介したいと思います。





写真1 土鈴づくりを指導中の金津さん



写真2 1ヶ所近い大物が逃げ上っていた水裏の土手



写真3 出石川の多孔質な護岸



写真4 日本テレビの取材風景



写真5 BBCテレビの取材風景



写真6 日本産動物研究会の一行(村井氏(左端)からのメール)



## 多自然型河川工事への提言

平成 2 年に当時の建設省から“多自然型河川工事”の通達が出された。その年に兵庫県養父町では円山川水系大屋川支流建屋川(たきのやがわ)で大きな災害が発生した。オオサンショウウオが多産することが分かり、対策を提案してきた。この事例は河川法の変わる前の早い時期に環境配慮した工事として、全国の河川工事へ大きな啓発の役目を果たした。さらに、平成 16 年には豊岡市の円山川支流出石川で破堤などの大災害が発生した。この時には建屋川以上の対策工事が実施された。しかし、河岸に多数の穴構造物を設置したものの、出石川では昨年 8 月の台風による出水で、原状復帰させたハンザキが再び下流へと流されたと言う中間報告を受けた。あれだけ多数の巣穴を付けたのになぜなんだろうか？

一方で、ハンザキ研の河川観察ステーションも大量の土砂で埋まってしまったことは、当ニュースレター No.44 で報告したが、写真 10 に示したように 10 ㍉位のハンザキ幼生 2 個体がステーションの水溜りに漂着していた。同時に 630 ㍉の成体も発見している。希少淡水魚のアカザの全長 125 ㍉もある特大サイズが採集できた。さらに、2 ㍉弱下流で、水田を見回りに出た地域の方が土手に上がっていた 970 ㍉の大物を保護して運んできてくれた。ハンザキの幼生やアカザは川底の石礫の隙間に潜む生き物であるから、石ごと大水に流されてしまうのだろう。夜間調査でもハンザキの幼生はほとんど姿を見せない。これは、ハンザキを含めたより大型の生き物に襲われることから身を守ると共に、石裏の水生昆虫を捕食している生態が推測できる。人口(鮠口?)のピラミッドを考えれば、裾野を構成する幼いハンザキの数は登録中の成体 1,486 個体の何倍もの数に及ぶはずである。運の良い個体は流れに乗って流されながら、流れの弱まっている場所に逃げ込むことができたのだろう。運の悪い多くの個体が流され、もまれて死んで行ったことが考えられる。大型個体も穴の中に引っ込んでいれば流されないで済んだだろうに、日中にもかかわらず出歩いていたと言うことになる。

36 年目になるハンザキの調査であるが、繁殖期の 9 月前後には調査を集中させてきた。その中で、人工巣穴で卵を守っていたオス親が生き埋めになったことが無いことを思い出した。生き埋めになって死亡しているのではないかと出入り口を掘り出して中を確認してもオス親はいつもいなかった。卵塊は親に揺り動かしてもらえないために泥を被ったまま酸欠で死んでいたことはあった。そして昨年 9 月には、アンコ淵の自然の巣穴でも同じく卵を守っていた内山主は生き埋めになっていなかったのである。このような事例を考えると、穴に潜んで暮らすハンザキは生き埋めになる危険を避けて、洪水時には巣穴から出て行く行動を取ることが考えられる。彼らは人間が歩けないような水流でも、川底の形態や流速のよりゆるい部分を探ることができるのだろう。あの軟らかな体を水底にピッタリ付けていればある程度の水は、やり過ごせるのだと思う。その代わりに、穴の中で生き埋めになってしまうと自分では穴を掘って脱出することができないので、その危険を避けるために洪水に流される危険を冒してでも巣穴を出るのだろう。

出石川や現在進行中の生野ダム下流域での工事のように、護岸に多数の巣穴を設置してやったものの、大水の際には役に立たないのではないかと反省を始めたところです。どうも陸上動物の人間の考える所は、自己満足が多いようだ。河岸に多数の複雑な空間を確保してやれば良いだろうと考えていたのだが、そうばかりはいかないようだ。無論、人工巣穴で繁殖もしているので、護岸内の構造物が全て無用と言うことではない。今後は巣穴だけでなく大水が出た時の水中動物の避難場所を考えてやらねばならない。

当所の河川ステーションは、水裏(流れの曲がる場所の内側)の寄り洲の下流端に作られた。水裏には土砂が溜りやすい。それは反対側(水衝部)が急流で多くの物を流しつつ河岸に流れが当たってそこに深い淵を形成することがある。それに対して水裏は流れが弱く、土砂などを流す力が弱まるために洲が形成される。同時に流されてきた動物たちも運がいいところに漂着できるのだろう。流された先に大きな本流やダムなどがあれば流勢も自然と弱まって踏み止まることができるのだろうが、流れを弱めるものが無いと海まで流されて淡水生の動物は死んでしまう。1 年前近い大物が逃げて上がっていた土手も水裏にあり、なだらかな土手になっている場所である(写真 2 参照)。

現在の河川工事では、何年かに一度の大水を流すことができる河川断面を確保するために、以前の河川よりも数倍の川幅になってしまう。そして同じ幅で兩岸はコンクリートで固められている。これでは、コンクリート護岸にいくら空間を確保しても駄目だということになる。そして河川が蛇行することの重要性を改めて見直さねばならないと思う。広い河川敷がある川では、ここに洪水時の緩流域を作ることが出来ると思う。水が引いた後に動物が干物にならないように工夫しなければならないが、それは土木のプロにお任せしたい。河川敷のほとんど無い悪名高い 3 面張りの護岸の場合にはどうしたらいいだろうか？ これもプロの面目に掛けてクリアしてくださいと提案しておきます。

私はつつい工作物の工夫に考えが行ってしまうが、護岸用のコンクリートブロックでも工夫できるのではないかなと思う。ブロックの上流側は流れを反らし、下流側には動物が逃げ込めるシェルターはどうだろうか？ 強い流れの中心から離れた弱い流れを形成させることはできないだろうか？ これは河川工学や流体力学のプロの皆さんへの提案です。しかし、アカザや 20 ㎝以下のハンザキ幼生が、川底の石ごと流されてしまうのは防げそうも無い。そんなことは昔から繰り返して起こっていたことなのかもしれない。そこまで考えなくともいいのかもしれないが無数の幼生が流され死んでいくのかと考えると、やはりこれも解決したいものだ。

基本的に流れによって岩が砕けてさらに小石になり砂利になって海岸に砂浜を形成するのだから、これが自然の摂理なのだろう。水裏の砂洲にはカワニナも多数打ちあがっていることも昨年大水の後で確認できた。石の上を這い回って付着藻類を食べているカワニナの多くも流され砕け河原に打ち上げられて乾燥死しているのだ。と言って川底の石礫を固定させることはできない。大水の本流から分離される緩流域をどのように工事で作り出すことができるのだろうか？ 川幅を均一にしないことがまず第一目ではないかなと思う。

## コンサベーション・インターナショナル (CI)

CI とは 1987 年に設立された国際的 NGO として、世界の 40 か国で 800 名以上のスタッフが生物多様性の保全に取り組んでいる団体とのことである。日本の淡水の生態系保全に関して、オオサンショウウオを切り口として何かできないかということで、京大(院)松井教授から紹介されての視察であった。前日には岡山のハンザキ保護センターも視察してきたと言う。でかいヤツがいたというので、あれは中国産種で 170 ㌔あり生きている個体として最大の個体だと思うと付け加えておいた。日本のスタッフ 3 名と 4 人の大きな外国人、さらに BBC の取材陣が 3 名と言う賑やかな一行であった。

生物多様性ホットスポットとして 34 か所が指定されており、日本政府も 2002 年から参加して保全活動の支援を行っているそうです。私自身もこのような活動団体があることを全く知らなかったのですが、やはり自然の保全と言うことになると、自分の国だけでやってもあまり効果が無いのだと思いました。

科学、人間の福祉への貢献、パートナーシップという 3 本柱に基づいて保全活動を展開しているそうですが、生物多様性応用自然科学センターで地球規模のデータ収集・解析を行い科学的な保全手法に基づいた活動が実施されていると言う。オオサンショウウオが日本の河川生態系において頂点にあるが、何ができるか提案してほしいとのことであった。

.....

## お知らせ

①今年の第 7 回オオサンショウウオの会は、9 月 11・12 日に決まりました。開催地は岡山県真庭市ということは、昨年の鳥取県の大会で決まっています。この時期には各地とも秋祭りや各種学会が開催されるので、なかなか日程を決めにくいのです。しかし、ハンザキにとっては繁殖期であり、各地の繁殖状況を見学できるチャンスでもあります。これまでは 9 月下旬か 10 月上旬に開かれていたのですが、今年は都合でこの日程になりました。

私としては、アンコ淵の繁殖巣穴ではこの 4 年間は 9 月 10~15 日に産卵行動があったので、実は現場を離れたくなかったのですが、留守中のことは 24 時間観察カメラの力を借りて記録することにしました。しかし、20 日間も録画すると見直して編集するのに莫大な労力が必要になります。やっぱり自分の目で見るというのが一番なのでしょう。感動も印象もなかなか薄れることはないので、フィールドワークは飽きることはありません。

②NPO 法人としての今年のイベントはほぼ決まりました。ホームページに公開しますが、例年通りのことだけでは皆さんに飽きられてしまいますので、少しずつですが変化させていきたいと考えています。今年は 8 月 28 日に“アフリカ料理を食べて夜のハンザキを見よう！”を考えました。熱帯アフリカと冷たい川のハンザキという取り合わせが面白いと思うのですが、ぜひ多くの方にご参加いただければと思います。

## ハンザキ研日誌

2010 年 1 月

- 1 日 昨年 12 月 18 日からの越年中
- 5 日 デマンドバスで食料の調達に生野の街へ
- 12 日 ハンザキの月例健康診断(竹野スノーケリング・ビジター・センター長の本庄所長初参加)
- 14 日 オオサンショウウオ保護センターのプール水面が凍結する
- 18 日 ハンザキ・パネル 47 枚完成・ミニホールへ展示
- 19 日 出石川工事現場(国交省管轄域)から変態直前のオオサンショウウオ幼生 3 個体を収容
- 21 日 朝来市・養父市域約 150 か所の災害復旧工事について兵庫県養父土木事務所・朝来市建設課などと検討
- 22 日 アンコ淵観察カメラ首振り故障
- 24 日 日本テレビ“ミリオン・ダイス”取材、タレントのイモトマユ?さんの番組
- 25 日 ・BBC 取材、3 名  
・コンサベーション・インターナショナル一行 7 名視察に来所
- 26 日 GS-295 終了(12 月 18 日～)
- 27 日 日本産動物研究会にて講演(宍粟市山崎町にて)約 30 名
- 28 日 ・同上の会のメンバーがハンザキ研視察、約 20 名  
・GS-296 開始(～2 月 16 日)
- 29 日 養父土木事務所と朝来市教育委員会から来所、河川工事の件で
- 30 日 ・生野学園 10 名来所  
・NPO 法人事務局会議 6 名出席  
・西日本エコテック、24 時間観察カメラ取り外しに来所
- 31 日 県立大付属高校の梶遙香さん見学の予約あり来所、即日 NPO 法人へ入会

.....

## ハンザキ所長のツブヤ記録

時々スランプに陥る。このハンザキ研ニュースレターは、私がほとんど一人で月刊している。よく書くことが続くねと言われることもあるが、「フィールドに恵まれているからね」と答えている。現在、創刊 4 年目の最後の 48 号がとどこおっている。調子に乗っている時には数日で 6 ページを仕上げてしまうが、不調になると全く書く気になれない。ここに 49 号を進めているものの、48 号は稿了したとしながら、まだ仕上がっていない。この分では 3 月に 50 号とまとめてお送りすることになりそうだ。どうしてスランプになってしまうのか分からない。春から秋に掛けては生き物が活発に姿を見せるが、寒さの厳しい当地では冬眠状態になって、私の筆(キー・パンチ)が進まないのかもしれない。NPO 会員の皆様への約束が守れないのは心苦しい所ですが、なんとか追いつきますので……。